HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	炭鉱企業におけるスポーツの展開III（戦後隆盛期）：北海道炭礦汽船株式会社の事例
Author(s)	畠山, 孝子; HATAKEYAMA, Takako
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 101, 201-210
Issue Date	2007-03-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.101.201
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20491
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_201-210.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究科
紀要　第101号　2007年3月

炭鉱企業におけるスポーツの展開Ⅲ（戦後隆盛期）

―北海道炭礦汽船株式会社の事例―

畠　山　孝　子*

Early history of Sports in Japanese colliery companies　(Ⅲ)

－ History in Hokkaido Colliery and Steamship Company －

Takako　HATAKEYAMA

【概要】本研究の目的は，北海道炭礦汽船株式会社の事例をもとに，炭鉱企業スポーツの実態を，社内機関紙(『炭光』)から明らかにすることである。とくに本稿では，戦後まもなくの時期に(1947年～1960年）社長杯スポーツ（オール北炭）大会が開始された経緯をたどる。その背景には，戦前から続く重役カップといった企業スポーツの物的資源（施設・設備等）や人的文化的資源の連続する側面がみられた。それは，全従業員とその家族を含む形で実施され，職場内におけるスポーツ交流促進にも結びついていたと考えられる。しかしその後は，炭鉱企業を巡る環境の変化に歩調を合わせるように，『炭光』におけるスポーツ関連記事は減少の一途をたどることになる。
【キーワード】夕張市，北炭，企業スポーツ

Ⅰ研究目的

2006年，財政破たんした北海道夕張市は，1900年代，日本を代表する産炭地として発展した地域であった。本研究の事例とする北海道炭礦汽船株式会社（以下北炭と略す）は，夕張地域に多くの炭鉱を開き，当時，夕張は「北炭の城下町」といわれた。

北炭の前身である北海道炭礦鉄道会社（1906年，北海道炭礦汽船株式会社に社名変更）は，1889年，堀基によって設立された。設立当初は，鉄道の運輸営業及び幌内，幾春別両鉱の採炭を手がけ事業を拡張していった。「わが社70年の歩みは，そのまま北海道開発の歩みである」[1]と称されるように，北炭はおよそ100年の間，北海道と共に発展を遂げるのである。

北炭は，早くから（1914年頃）企業内にスポーツを奨励した。どの時代の企業スポーツもそうであるように，北炭のスポーツもまた，企業の運命共同体として，その時代，時代，企業の経営業績に合わせ，栄枯盛衰を繰り返している。

本研究は，当時発行された北炭社内報を基に北炭スポーツの実態を明らかにするものである。北炭スポーツの導入期と戦前の展開，敗戦後の復興期のスポーツ活動と展開については既に報告している[2)3)4)5)6)]。

そこで今回は，戦後復興後の北炭スポーツの隆盛期を取り上げる。北炭は復興景気の後押しを受け，戦後の全盛期を迎えるが，スポーツ活動もまた隆盛となっていく。炭鉱産業華やかな

* 浅井学園大学短期大学部人間総合学科教授

時代の，炭鉱企業スポーツの姿を追うことで，炭鉱地域の特異な地域性の中で育まれた，スポーツ活動の意義と企業スポーツの果たした役割について検討を試みたい。

Ⅱ研究方法

1．北炭社内報の特徴と研究方法

北炭で発行された社内機関誌は『社友』と『炭光』である。『社友』は北炭職員層向けに1923（昭和12）年創刊1944(昭和19）年まで発行された冊子である。『炭光』は1928（昭和3）年発行，1945（昭和20)年一時休刊，1950（昭和25）年から1981（昭和56）年まで発刊された新聞である。

『北炭七十年史稿本』の「機関紙」の項には「労務者の思想，教養の向上を目的として，昭和三年九月社内機関紙として『炭光』を発行した」[7)]とある。戦時期の中断を経て，戦後の『炭光』は従業員全体を対象に再刊され，戦前の掲載記事の思想強化的傾向は一掃される。

本研究では，戦後，北炭の社内報として一本化された『炭光』に掲載されたスポーツ記事を中心に調査を進める。その他，北炭史料は，1939（昭和14）年発行の『北炭五十年史』および1958（昭和33）年発行の『北炭七十年史』を使用し，それぞれの稿本（三井文庫所蔵）も適宜参照した。『炭光』は夕張市石炭博物館所蔵である[注1)]。

なお，北炭スポーツの関係者からも，随時，聞き取りをおこなった。

Ⅲ戦後隆盛期を中心とした北炭のスポーツ

1．北炭の歴史（戦後）

戦後，復興景気の中，日本を支えるエネルギーとして石炭の需要は拡大し，炭鉱は著しい発展をとげた。北炭は1944（昭和19）年，軍事会社に指定され，国の増産指令（国策）を受け，切羽を増設し，採炭を一層推し進める。その影には，外国人強制連行，強制労働があった。

敗戦時，崩壊状態であった炭鉱は，その後，復興景気と石炭の需要の増大で，全盛期を迎える。北炭の城下町夕張は，当時24の炭鉱を有し「炭都」と呼ばれた。

1955（昭和30）年代に入り国内エネルギー需要が石炭から石油へ変わる中，1960(昭和35）年，夕張二鉱では42名が死亡するガス爆発事故が発生した。北炭はこれを契機に本格的な合理化に着手する。1962（昭和37）年には石油が自由化となり，石炭に対し国は出炭制限を行なっている。スクラップ・アンド・ビルド政策の本格化により，炭鉱界は大きく揺れ動くこととなった。北炭は、炭鉱の合理化を進める一方，同年三井観光開発を設立する等で会社存続の対応を図っていく。当時の社長，萩原吉太郎は，政府からの援助を引き出す等，石炭業界は政府の手厚い保護政策も受けた。

しかしそれでも石炭産業は，斜陽産業といわれるようになり，北炭はさらなる合理化を迫られた。北炭は経営危機に落ち入り，1973（昭和48）年以降，1975（昭和50）年平和鉱，1980（昭和55）年夕張二鉱，1980（昭和55)年清水沢鉱と閉山が相次いだ。

この間，1970（昭和45）年，北炭は生き残りをかけて，夕張新鉱開発に乗り出していく。1973（昭和48）年のオイルショック後，国は石炭見直しを行なう中のことであった。1975（昭和50）年，北炭夕張新炭鉱は日本一の良質炭を採炭する北炭の最新鋭炭鉱として操業を開始するものの，産出炭確保を急ぐあまり，保安軽視が叫ばれる中，開坑当初から鉱内火災に見舞わ

れる。1981（昭和56）年10月，新鉱はガス突出事故により９３名の犠牲者を出し、同年12月，北炭夕張新炭鉱は札幌地裁に会社更生法の適応を申請，事実上倒産する。翌年７月，政府事故調査委員会は「事故原因は不十分なガス抜きだった」と人災説を報告した[8)]。事故後，政府，三井グループは資金援助拒否，1982年（昭和57年）９月従業員は全員解雇となった[9)]。

1995年（平成７年）２月，北炭は東京地裁に会社更生法の適応を申請し，事実上倒産する[10)]。

２．戦後の隆盛期を迎える北炭スポーツ

(1) 北炭スポーツの導入期と重役カップ

戦後期のスポーツ活動について話を進める前に，その布石となる戦前のスポーツ活動について触れておかなければならない。北炭が企業内にスポーツを導入したのは，1914年頃である。そこに大きく関わった人物が磯村豊太郎であった。

磯村は，経営危機に陥った北炭に，専務取締役として就任し，企業の再建を図る。北炭は，磯村によって「我国屈指の炭鉱会社として鵬翼を斯界に伸ぶるに至れり」[11)]と称されるように建直へと向かっていた。磯村は就任の間に「労使共栄の原則を具現し」[12)]，「福利施設の完備医事衛生の改良」[13)]を掲げた。北炭においては労使共栄の一施策として，あるいは福利の改善策として，スポーツ施設の充実が図られ，スポーツが奨励されていった。

磯村がスポ―ツに大きな関心を寄せ，北炭においてスポ―ツ奨励に力を注いだことは，『五十年史』稿本によって次のように記されている。

> 尚ここに特筆すべきは我磯村会長は特にスポーツに深き関心を持たれ，之が円満なる発達を念慮せられ，特に本会体育部に「磯村カップ」，「磯村刀」，「磯村弓」等を寄贈せられたるを以て，前記各支部に於て挙行する運動競技会の外，毎年八，九月会長の渡道を機とし，社友会本部主催の下に各支部対抗磯村賞陸上競技会及武術大会を挙行して妙技を競ひ覇権を争うを恒例となし[14)]

「磯村カップ」等のいわゆる重役カップ戦は，北炭で展開された多くのスポーツ種目に広く実施される（表参照）。柔道，剣道，弓道，銃剣道及び陸上競技には社長・会長である磯村のカップ，テニス[注2)]は高城カップに始まり，その後赤羽カップ，三国カップと３名の重役によって受け継がれる。スキーは高洲カップ，野球は古谷，藤井，加藤の三氏のカップ戦が行われた。カップに名を連ねる重役は，いずれも磯村体制下に就任した常務取締役陣であった[15)]。

(2)「炭光」掲載のスポーツ記事からみた戦後の北炭スポーツ

図は『炭光』新聞に掲載されたスポーツ関連記事の掲載件数の年次推移である。1950（昭和25）年再刊年の掲載は，終刊までの29年間を通して最も多く118件，掲載種目数は18種目，種目別では野球が突出して多く42件，次いで陸上と運動会が９件，相撲８件，庭球（現在のソフトテニス），卓球が７件の順であった。以後，スポーツ関連記事の掲載は徐々に下降するが，1963（昭和38）年以降，その減少は著しい。この時期の北炭の経営状況がこの減少の背景にあるのはいうまでもない。1963（昭和38）年，国は石炭政策を大きく転換する。すなわち，優良炭鉱に生産を集約するスクラップ・アンド・ビルド政策の施行である。これにより多くの炭鉱は閉山に追い込まれる。北炭も例外ではなかった。

表　重役カップ一覧

スポーツ種目名	開始年	役　職	氏　名	備　考
柔　道	不　明	会　長	磯　村　豊太郎	
剣　道	昭和3年		島　田　勝之助	
弓　道	昭和2年		（昭和15年より）	
銃剣道	不　明			
陸上競技	大正15年			
庭　球	大正12年	常務取締役	高　城　規一郎	昭和18年野球庭球島田会長杯となる
庭　球	昭和6年	常務取締役	赤　羽　克　己	
庭　球	昭和12年	専務取締役	三　国　庄二郎	
スキー	昭和3年	常務取締役	高　洲　鐵一郎	
軟式野球	昭和13年	常務取締役	古　谷　金一郎	
野　球	昭和15年	専務取締役	藤　井　暢七郎	
野　球	昭和18年	専務取締役	加　藤　徳　行	
ゴルフ	昭和8年	取　締　役	日比谷平左衛門	

『北炭七十年史』第五部資料pp. 20−22及び「社友」の記事を基に作成

戦後の北炭は，復興景気と，貴重なエネルギー「黒いダイヤ」といわれた石炭の需要の増大で企業としての再生を果たしていた。北炭内のスポーツ活動もまた，この景気に後押しされて戦後の全盛期を迎えるのである。しかし，その後の石炭から石油へのエネルギー転換によって，炭鉱産業は斜陽化し，衰退の道を辿る。戦後復興とその後の盛衰，北炭スポーツは激しい時代の流れの中で展開されるが，ここでは，北炭スポーツの戦後隆盛期と位置づけられる 1947（昭和 22）年から 1960（昭和 35）年までを振り返ってみたい。

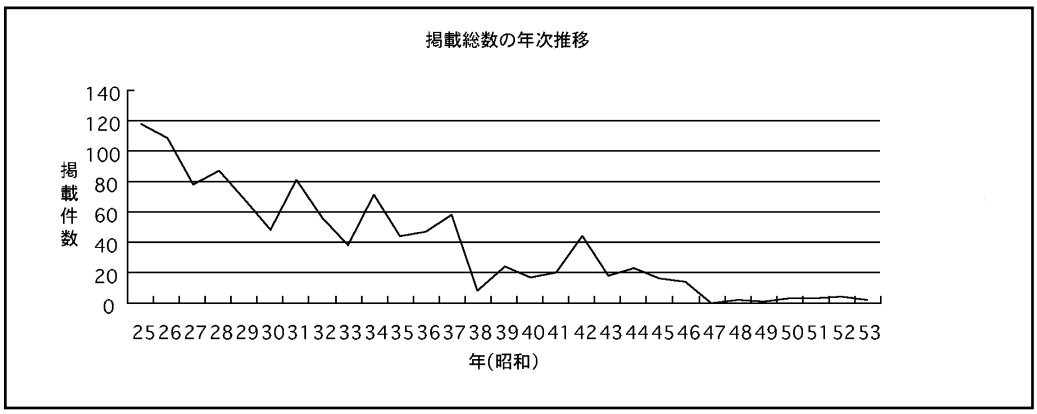

図　「炭光」掲載のスポーツ記事件数の年次推移

(3) 北炭スポーツの復活

北炭のスポーツの隆盛期を象徴するのは，社長杯スポーツ（オール北炭）大会である。戦後，北炭がこのような大会を奨励した背景には，戦前の重役カップ戦があったことは想像に難くない。

1950（昭和25）年9月1日掲載の「やまのスポーツを語る座談会」[16]で，勤労部長は次のよう挨拶している。

> 最近社内におきましても各方面のスポーツが盛んになり，多くの立派な選手が活躍され，北炭の名を内外にとどろかせておりますことは嬉しい次第でありますが，なかでも特に新進気鋭の皆さんがたが中心になって，今後の北炭のスポーツを益々盛んにするため，北炭のマ―クを見なくても人目でわかる一つの，「北炭型」をかたちつくると共に，そこに立派な「北炭の氣風」というものを完成させる根石となられるよう，今後ともたゆまざる努力を続けていただきたいと思います。
>
> 私たち日本人にとって敗戦も決して無駄であったわけではなく，幸いそこに残されているのは，明朗な右も左もないスポーツのフェアプレーの精神による平和で明朗な日本の建設の責任であります[17]。

終戦後，北炭の各鉱にスポーツが復活し，1950年には，「全山にスポーツ熱の盛ん」となる。敗戦の混乱期に北炭の人々が，スポーツによりどころを求めたのは，戦前のスポーツ活動が基盤となっていることが想像できよう。北炭のスポーツは，会社再建の労務管理の手段として導入されたが，北炭内に広く展開される中，実施者の主体的な欲求に動かされて社内に広がっていったことが考えられる。それは，終戦の混乱の中，自主的・自発的な行動として湧き起こったことからも窺えるのである。このスポーツ活動を支えた要因の一つとして，戦前の北炭のスポーツ施設・設備の存在の大きさをあげることができる。戦争によって荒廃していたにせよ，各競技の多くの施設は身近に残っていたことが，スポーツ実施を可能にしたためである。

その時代その時代の人々によって，脈々と培われた北炭のスポーツ資源は，戦争を経て，民主的に労使の枠を越えて新しく形成されつつあったとみられる。この時，スポーツの「明朗な右も左もないスポーツのフェアプレーの精神」は，「平和で明朗な日本の建設」のため，機能することが期待されていた。また，スポーツを通して，今後，内外に北炭を広報することを視野に入れた勤労部長の発言は，現代の企業スポーツに通ずる一面を示していた。

(4) オール北炭スポーツ大会

1951（昭和26）年開催されたオール北炭大会関連記事の中でも「オール北炭陸上競技大会開く」の記事は，2面にわたって大会を詳しく報じている。文面を抜粋すると次の通りである。

> 炭鉱人の意気をもて，大いなる記録に挑んで走れ，跳べ，そして投げよと，3万従業員とその家族の期待と注視のうちに迎えられた，オール北炭陸上競技大会は，この日を期して備えた夕張鹿の谷競技場を会場に九月三十日けんらんの幕を開いた[18]。

この席で，吉田会長は次のよう祝辞を述べている。

> われわれ勤労人にとってもっとも必要とするのは，健全な身体と精神であり，戦後におきましては，

特にこの点に欠け再建にとり重要な責務をおろそかにしていましたことは，まことに遺憾にたえないところでございました。この点，スポーツを通じて再建への心構えを養成し，これに寄与するということは，もっとも望ましいことであり，本大会もまた，…（略）…重大なる意義をもつものと考える次第であります[19]。

記事はまた役員席の状況を次のように報じている。「この日の役員席には，来道中の吉田会長をはじめ，夕張，平和両鉱業所長をはじめＮ重役，その他首脳部，来賓席には，北島夕張市長はじめその他官民代表，労，職組，特選労務者代表ら百余名がずらりと居並び…（略）…」[20]と。野球大会ではこの大会を「意義ある社内親睦交歓大会」[21]と位置付けている。また，スキー大会は「１万の観衆にスキーの醍醐味を存分に満喫させ，その美技に陶酔させて盛況裡に終了した」[22]と記し、職種の区別なく全従業員とその家族を対象とした大会であったとの印象を残している。いずれも，内外に労使一体となってのスポーツ大会開催と印象付けている。

1956（昭和31）年には，萩原氏の新社長就任を機会に，全北炭スポーツ大会の優勝カップが新調された。当時の記事は以下の通りであった。

全北炭スポーツ大会は，本店主催の下に年々隆盛をきわめ，日ごろ職場にあって充分実力を発揮できずにいるスポーツマンにとってなによりの楽しみであると同時に，またいっそう飛躍し中央進出の機会を得られる意義深いものである。そのため会社においても本大会には特に力を入れ，炭界不況の折にも中止することなく，終戦後今日までつづいて来ていることは幸いだった。本店においては，昨年８月萩原新社長の就任を機会に，各種大会に授与してきた賞杯を新調すべく計画しておったところ，幸いに社長の快諾となり，このほどいずれも立派なる賞杯と盾が出来上がり，労務部を通じ札幌の労務課に送られてきた[23]。

新社長就任を期に優勝カップが新調され，オール北炭大会はいよいよ盛んとなる。ここで記事は，スポーツ活動に対して，いかなる時も企業を上げて支援してきた北炭のスポーツに対する姿勢を再確認している。また，スポーツでの中央進出を射程にした，企業の広報戦略もにじませている。

しかし，1961（昭和36）年頃から，石炭産業は転換期を迎えていた。主要エネルギーは石油へと移行し，石炭業界は合理化を進め，北炭の経営も危機に陥っていく。社長杯をもって，スポーツの理解を強調した北炭であったが，オール北炭スポーツ大会の開催は，1962（昭和37）年をもって休止するのである。

(5) 職場内スポーツ

北炭のスポーツ大会はどの種目も観衆が多く集まる。陸上競技大会を伝える記事には「３万従業員とその家族の期待と注視のうちに迎えられた」[24]とあり，同関連記事で大会審判長は「あれだけ熱心な観衆がきて下さったのであるから」[24]と自らの解説の仕方を顧みる。柔道大会では「七千の観衆が手に汗」[25]と報じている。記事の写真からも，観衆の多さは見て取れる。このようにやま全体がスポーツに強い関心を寄せていることを窺い知ることができる。また，次のような記事から，職場の支援・協力の体制が伝わってくる。

野球選手の大半は坑内夫で職場では重要なポストにあるため番方[注4)]が狂ったりすると試合にも相当障害を伴いました。公式試合の場合など，無理に時間を都合してもらうわけですが，選手としてはこんな点が上司や同僚に対し一番心苦しいところなのです。でも選手を後山にもつ先山の理解もまた格別で，「お前のぶんは俺たちが引き受けた。頑張って勝ってこい」と激励してくれるのには，涙が出るほど嬉しくて，それだけに試合にも責任を感ずるわけです[26)]。

北炭の従業員の多くはスポーツに関心を持ち，大会観戦を始め，職場では選手に対しても協力的であった。

職場内対抗スポーツ大会も盛んであった。昼休みにはスポーツに興じるなど，職場全体にスポーツは広がっていた。『炭光』の記事は各課対抗庭球大会を次のように伝えている。

試合は庭球部員を除く選手３組のトーナメント戦によってなされたが随所に好プレー，珍プレーを展開し多数の応援観衆を喜ばせ，なごやかな交歓のひとときをすごした。…（中略）…試合は結局体力，技術ともに優れた勤労部チームが強力なチームワークとＮコーチの好リードによって実力以上の戦いぶりを示し，連続優勝をとげた。…（略）…その他副長のねばり，係長の真剣なプレー，副所長を始めとする経担会チームの勝敗を度外視したなごやかな試合ぶりは印象深かった。この日はほとんど全員がコートに集まり，テニスを通じての親睦と健康の増進をはかったという意味で大いに意義があり…（略）…[27)]。

関係者から当時のことを聞き取ることができた。ここに記載のＮさんは，「昼休みになるとここの連中は食事も早々にコートへ行って，（テニスを）ほとんどやっていた」と当時を振り返った。庭球部員は選手としては出場できないので，コーチや審判を引き受けたようである。Ｉさんは楽しい催しであったと，次のように思い出を語っている。

庭球部の人は駄目と，あと審判とか，教える係りやるんですね。結構各対抗盛んに，面白かったですよ。それも日曜でなくね，仕事終わって例えば４時に終わるでしょ，そうすると４時３０分から，経理と，庶務課とか，そして次の日は，工務課と資材課とかね，そして１週間ぐらいかかって，決勝やるわけですね。

(6) スポーツに理解のある上司の存在

北炭には，スポーツに理解のある上司が多く，日ごろからスポーツを従業員に奨励することで，職場内スポーツが盛んになった様子を，記事から読み取ることができる。

砿務のＢ係長さんには頭が下がりますね。単にスポーツに理解あるというだけではなく，いつも若い者といっしょになって，自分もやるし，選手の面倒などを良く見てくれる。したがって選手も一生懸命にやるというわけで職場も明るいですね[28)]。

Ｈ鉱の場合Ｌ鉱長自ら庭球の選手で，ラケットを握って活躍していますから，他競技に対しても理解があり，奨励こそすれいやな顔はしないので助かります。遠征するときなど，番方をやりくりしても出してやる。またスポーツをやらない人にはやるようにすすめています[29)]。

戦前では1928（昭和３）年当時，スポーツに理解を示す上司の一人であるM鉱長のもとで，スポーツの黄金時代を築いた[30) 31)]ことは，戦前「社友」の記事が伝えている。また，夕張赴任の際に「テニスラケットを背負ってきた」[32)]北炭重役Ｆ氏は，戦後スポーツの振興に大きな役割を果した人物であると関係者が語っている。戦前，戦後を通して，北炭のスポーツを支えたことの一つとして，スポーツに理解のある上司は大きいな存在であった。上司のスポーツに寄せる熱意が，鉱全体の意気込み（空気・士気・雰囲気）に表れることが想像できる。大会出場などに，便宜を図る上司のいる反面，仕事を優先に進める上司もいるが，おおよそ，北炭の場合，スポーツに理解を持った仕事場であったと考えることができる。スポーツに理解のある上司の存在は，北炭スポーツ発展の一つの鍵となっていたと考えられる。

Ⅳまとめ

敗戦後の荒廃した炭鉱は，戦後復興景気に後押しされ，急速に再起する。この時期，北炭は戦後の全盛期を迎える。北炭のスポーツもまた隆盛を極める。戦後北炭スポーツの旺盛を象徴する催しの一つはオール北炭スポーツ大会である。大会開催を大きく伝える『炭光』の記事からは，職種の区別なく全従業員とその家族を対象とした大会であったことが窺える。いずれも，内外に労使一体となってのスポーツ大会開催と印象付けていた。

北炭では，企業内スポーツ大会が企業を上げての支援の下，華やかに開催されることと併せて，各職場内にもスポーツは浸透していった。スポーツに理解のなる上司が存在したことも，企業内スポーツを盛んにした一因であったと考えられる。

炭鉱に生きた人々は、炭鉱への深い愛着を，職種，労使の区別なく共有していた。『炭鉱（やま）・そして人』[33)]の著者吉井義雄氏は，夕張に生まれ，北炭の副社長を勤めた人物であるが，この著書からも，そのことは十分に読み取れる。

北炭に生きた人々の意識の根底には「一山一家」の強い連帯感や，「北炭人」の言葉を残すような仕事や地域に対する強い愛着心が存在した。それは，地底奥深くに命懸けで働く特殊な労働環境や，炭鉱企業が地域の生活を丸抱えする生活環境から築かれていったといえる。その意識の中で，スポーツは，これだけ華やかなに展開されたと考えられる。また，北炭のスポーツは，このような愛着心・連帯感を養うために，その役割を果したともいえる。北炭のスポーツは，炭鉱特有の発展軌跡を辿り，その時代を生きた人々とともにあったのである。

謝　辞

この研究を進めるに当たっては，元夕張市石炭博物館長青木隆夫氏，北海道大学大学院教育学研究科助教授大沼義彦氏には，貴重なご助言，ご指導を頂きました。ここに，深く感謝の意を表したいと思います。

注

注１）本研究で用いた『炭光』の発刊ベースは月２回である。

なお，1950年は第1号から第12号を発刊以下次の通りである。1951年（第13号～第35号）1952年（第36号～第55号）1953年（第56号～第75号）1954年（第76号～第99号）1955年（第100号～第123号）1956年（第124号～第147号）1957年（第148号～第170号）1958年（第171号～第189号）1959年（第190号～第211号）1960年（第212号～第232号）1961年（新年増刊号を含み第235号～第253号）1962年（第254号～第275号）1963年（第276号～第295号）1964年（第296号～第313号）1965年（第314号～第333号）1966年（第334号～第352号）1967年（第353号～第371号）1968年（第372号～第389号）1969年（第390号～第407号）1970年（第408号～第425号）1971年（第426号～第446号）1972年（第447号～第465号）1973年（第466号～第479号）1974年（第480号～第496号）1975年（第497号～第511号）1976年（第512号～第527号）1977年（第528号～第544号）1978年（第545号～第554号）

注２）本論文で対象としているテニスとは現在のソフトテニスをさしている。「庭球」は大会名及び競技会に関連した個所で用いた。

注３）北方資料館蔵，北海道炭礦汽船株式会社寄贈資料の労働協約書１９６４より引用

	普通勤務者	交替勤務者		
		一番方	二番方	三番方
始業時刻	午前８時	午前８時	午後４時	午前０時
就業時刻	午後４時	午後４時	午前０時	午前８時
休憩時間	正午より１時間	正午より１時間	内，１時間	内，１時間

前項の就業時間は，業務の都合又は勤務地の慣習若しくは季節により，組合と協議の上，２時間以内の繰上げ又は繰下げを行うことができる。

参考・引用文献

１）北炭七十年：北海道炭礦汽船株式会社，1958，はしがき

２）畠山孝子：「炭鉱企業におけるスポーツの展開（そのⅠ　導入期）―北海道炭礦汽船株式会社の事例―」，北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要，第43号，2002年，pp.7－20

３）畠山孝子，大沼義彦：「炭鉱企業におけるスポーツの展開（大正初期～昭和19年）―北海道炭礦汽船株式会社の事例―」，日本体育学会第53回大会体育社会学専門分科会発表論文集，日本体育学会体育社会学専門分科会，2002年，pp.69-74

４）畠山孝子：「日本のテニス草創期における磯村豊太郎の動向」，北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要，第42号，2004年，pp.163－175

５）畠山孝子：「炭鉱企業におけるソフトテニスの導入と戦前の展開―北海道炭礦汽船株式会社の事例―」，北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要，第41号，2002，pp.25－40

６）畠山孝子：「炭鉱企業におけるスポーツの展開（Ⅱ）―北海道炭礦汽船株式会社の事例―」，浅井学園大学短期大学部研究紀要，第44号，2006年，pp1－12

７）七十年史勤労編下巻の一（自昭和13至同20）第一次稿本：三井文庫所蔵，p.289

８）増谷栄一：『昭和小史北炭夕張炭鉱の悲劇』，彩流社，1996，p.223

９）同上書，p.223

10）同上書，p.225

11）北海道炭礦汽船株式会社：北海道炭礦汽船株式会社五十年史，1939．p．3

12）同上書，p．2

13）同上書，p．2

14）『五十年史』第九編従業員第一部社員第一次稿本，1938,pp.272－273

15）前掲書，1939，pp.135～136
16）『炭光』：1950年（昭和25年）9月1日
17）同上書，昭和26年10月15日
18）「炭光」，昭和26年10月15日
19）同上書，昭和26年10月15日
20）同上書，昭和26年10月15日
21）同上書，昭和26年9月1日
22）同上書，昭和27年2月1日
23）同上書，昭和31年6月1日
24）同上書，昭和26年10月15日
25）同上書，昭和27年7月15日
26）同上書，昭和32年12月15日
27）同上書，昭和29年8月1日
28）同上書，昭和27年9月15日
29）同上書，昭和27年10月1日
30）「社友」，第5第巻第6号，pp.55-57
31）同上書，p.56
32）前掲書，2002，p.14
33）吉井義雄『炭鉱（やま）・そして人』彩苑社，1988